

冬の終わりから春へ、そして秋へ(写真)

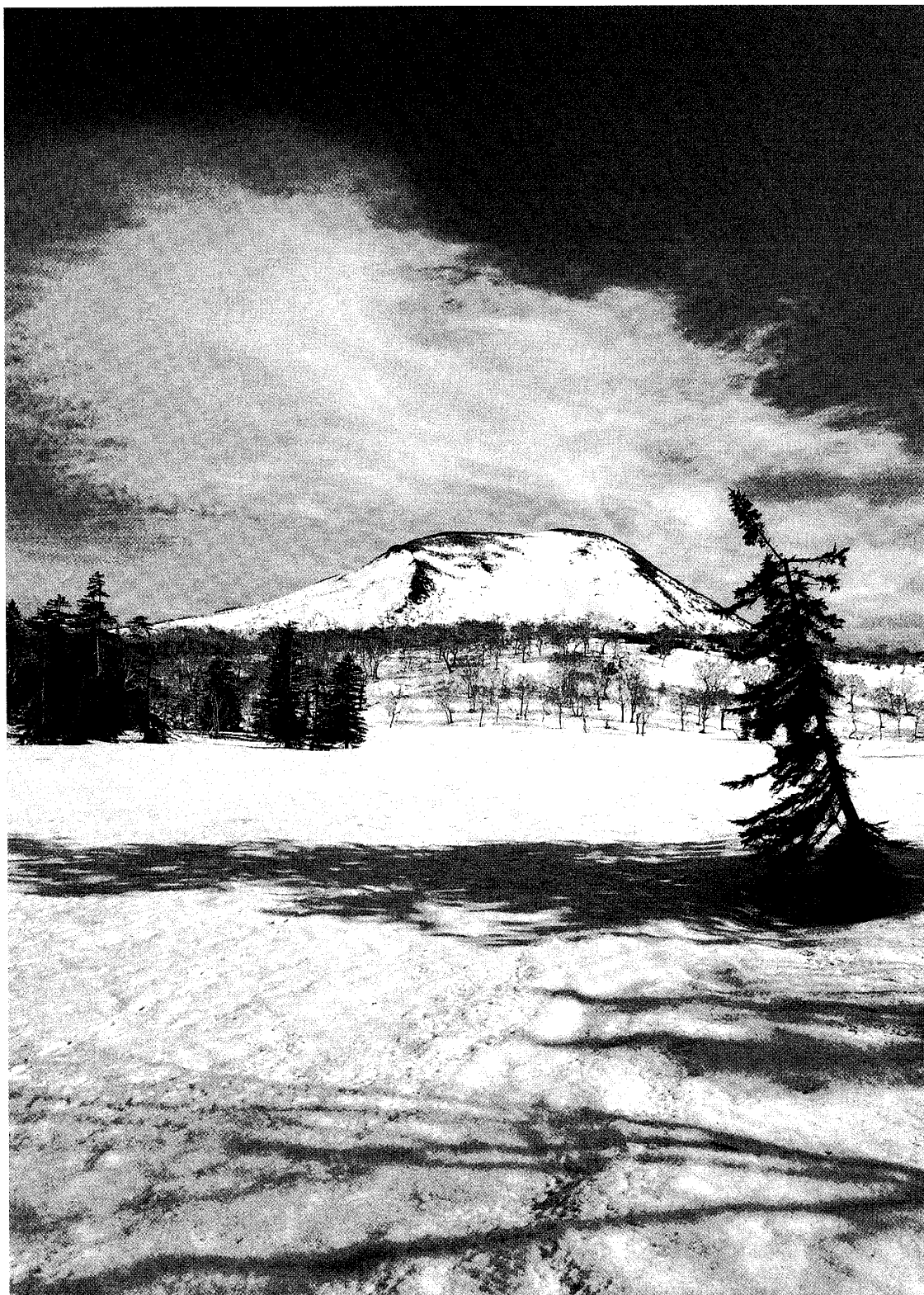
著者	藤原 等
雑誌名	生涯学習研究と実践 : 浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	9
ページ	27-42
発行年	2006-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002261/

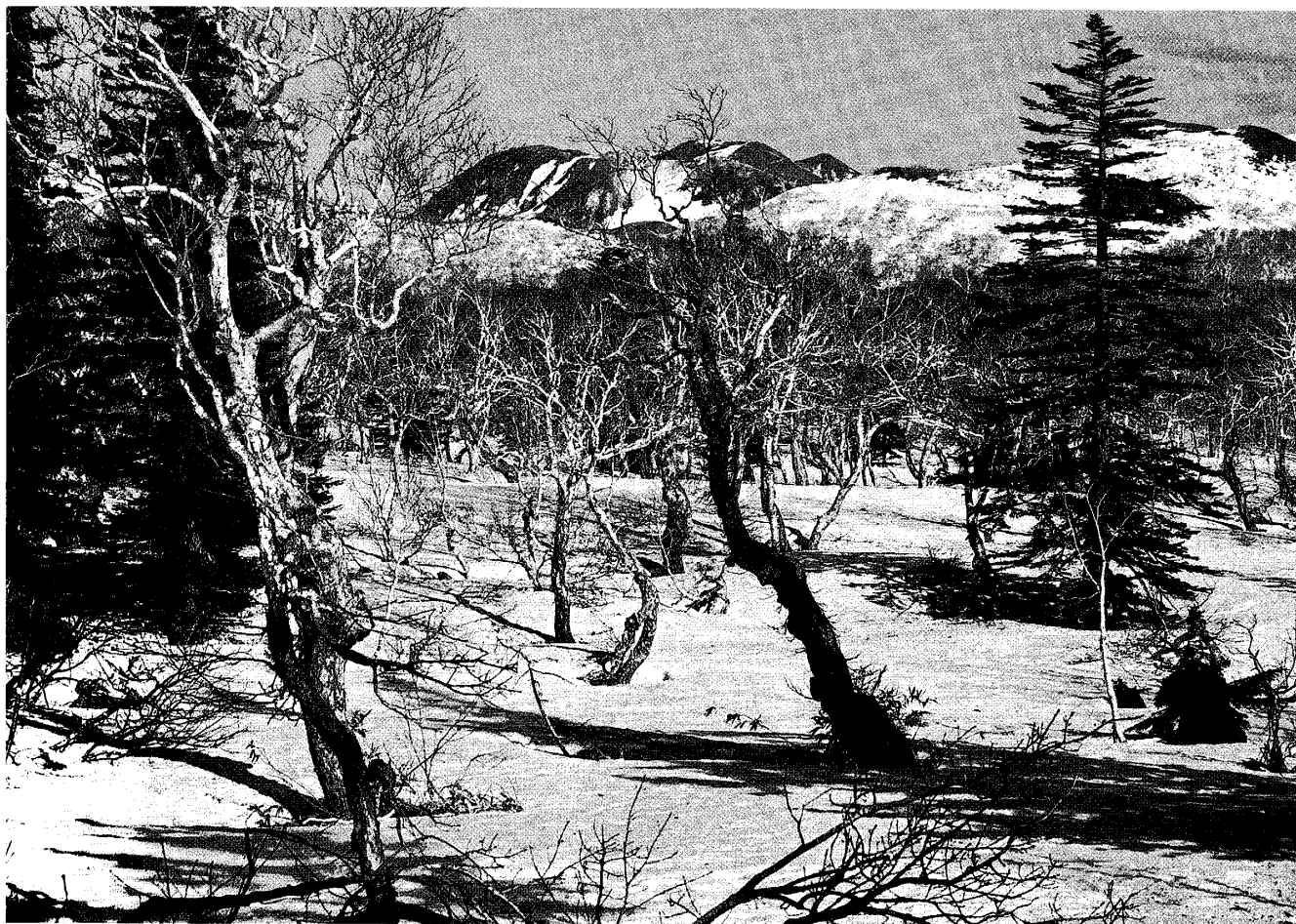
冬の終わりから春へ、そして秋へ（写真）

Late Winter through Spring until Autumn (Photograph)

藤 原 等

FUJIWARA, Hitoshi

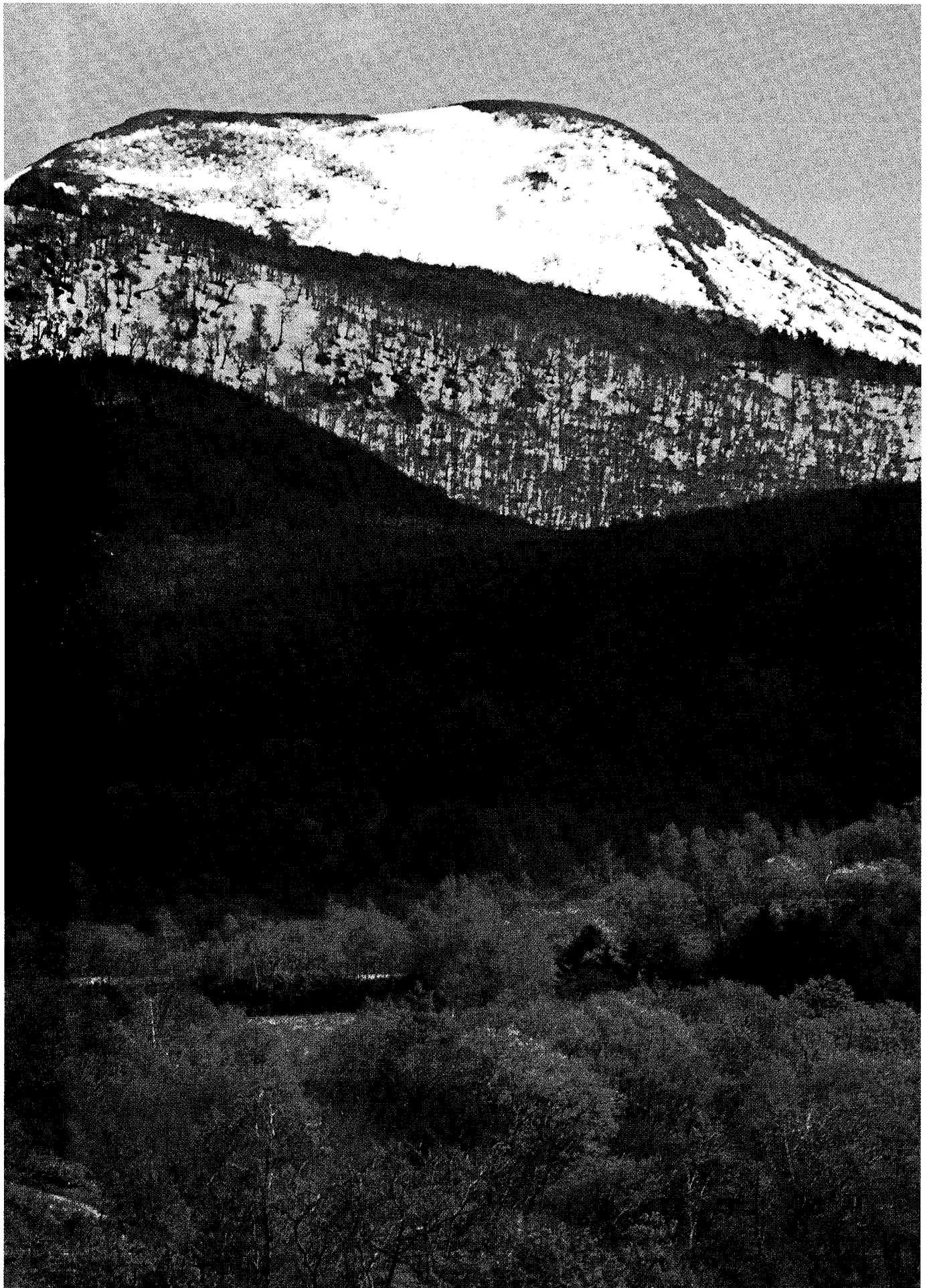


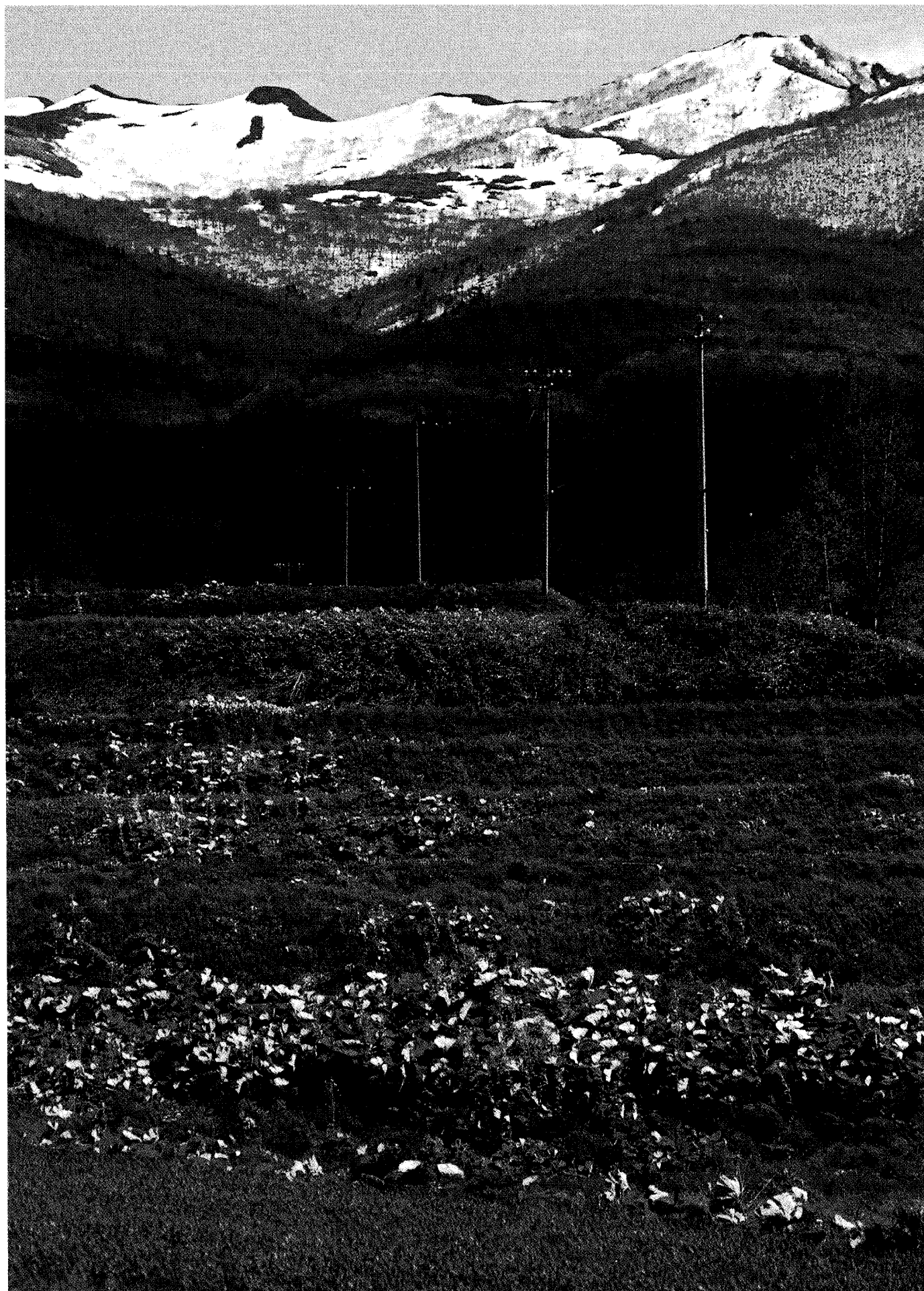












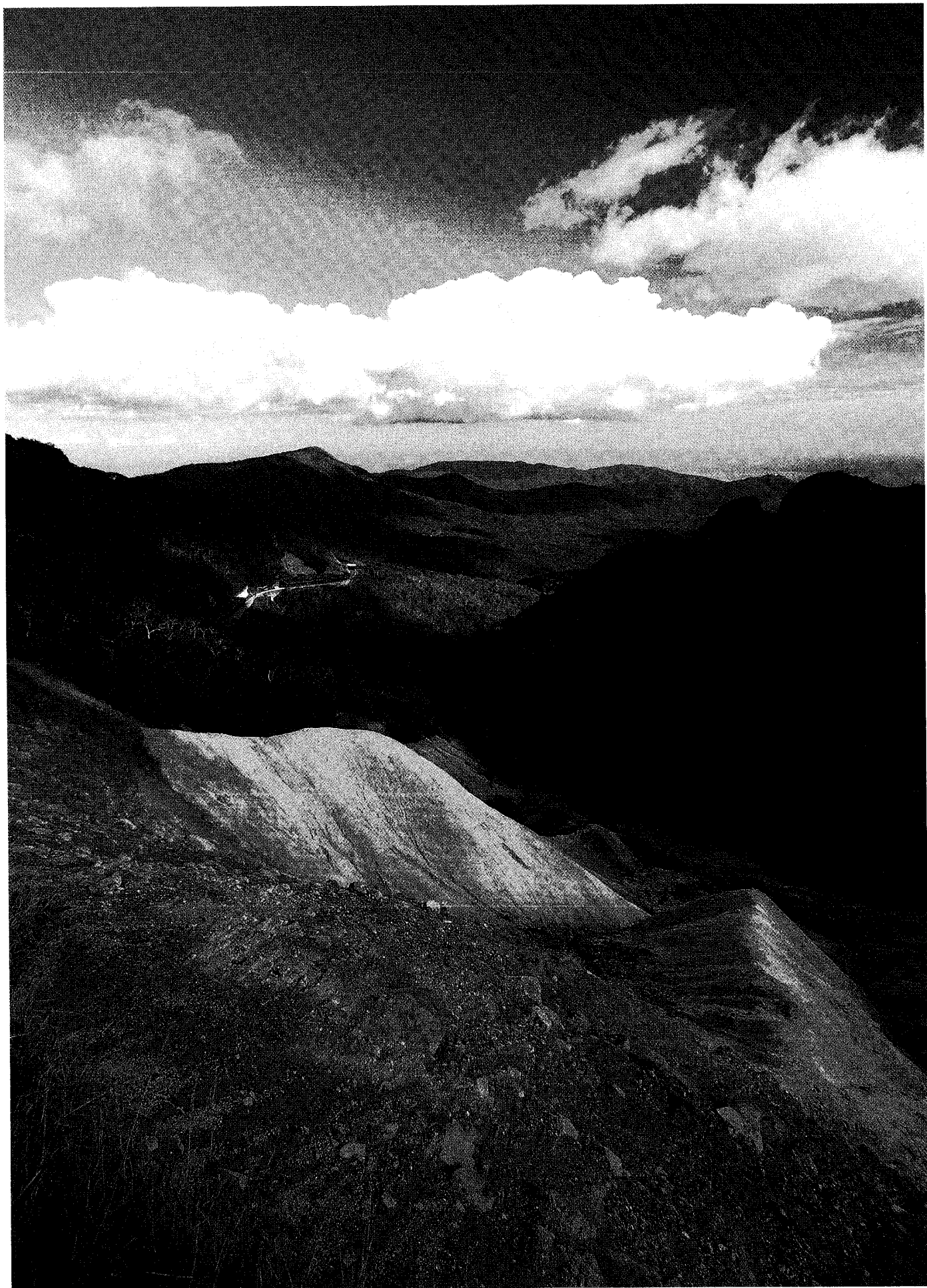


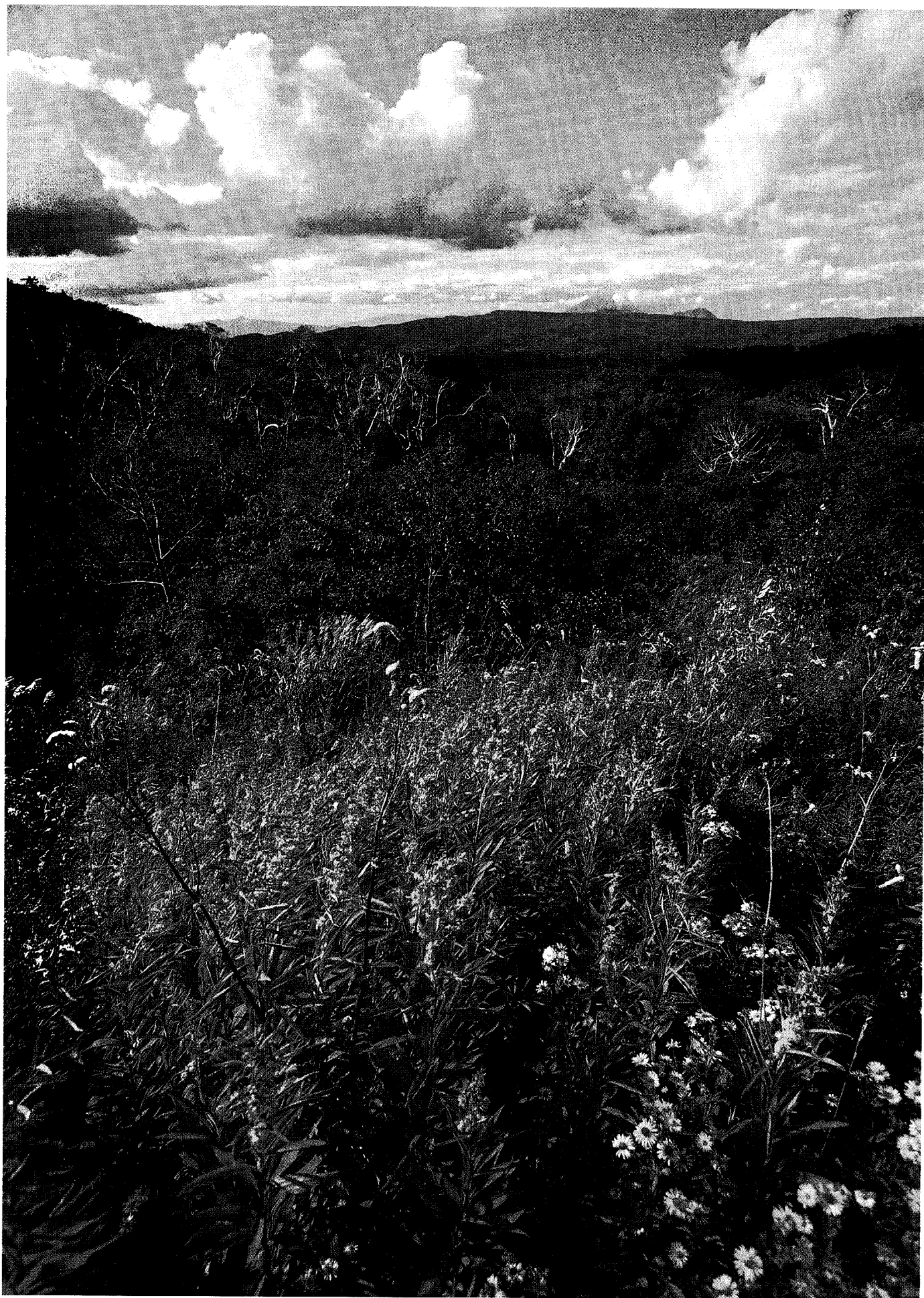














近ごろボヤキが多くなってきている自分が嫌になる。带状疱疹という病気を甘く見たわけではない。可能な限りの治療を試みた。後遺症として带状疱疹後神経痛が残った。左腹部から背中、背骨までぐるり痛い。幅約20cmの帯状に、1秒の休みもなく痛みが走るのだからたまったものではない。夜寝ていても、1時間半も眠ると痛みで目が覚める。腹部を手で押さえてみたり、摩擦を試みたりで熟睡できない。こんなことを3年もしているので、ボクの頭はどうかになってしまいそうである。どうかなってしまっていることに気がついている。体力も落ちた。血圧は乱高下で、近ごろは高止まりのまま血管が詰まったり、破裂してしまいそうであるが、なかなか、死ねない。痛みの感覚的種類にこれほど多様な種類があったのかと驚いているし、「生は偶然、死は必然」というけれども、なかなか自分の死の予想は難しい。いつ訪れるかもしれない自分の死と向かい合って、死ぬことが簡単ではないことをあらためて思い知らされている。10階のアパートから飛び降りれば決着がつくことは知っているが、臆病なボクは今のところそれをしない。やはり、写真は現場主義だから、特に、風景写真は現場がなかなか大変である。前にも書いたことがあるが、機材の重量が大変である。100gでも減らしたい。今年も、途中で、機材を捨ててしまいたくなった。近ごろのフィールドは、自分の糞尿も簡易トイレを使用して大事そうに持ち帰らなければならないから、入口の食料から、出口の糞尿まで重量積算に入るのである。何で、体調も心（頭）もおかしくなっているのに、フィールドに出てシャッターを切るのか。温泉や風呂に入っている時、フィールドを夢中で駆け回っている時、そしてシャッターを切っている時は带状疱疹の痛みから開放されているのである。まったくのナマクラ病である。それでも、雪溪の上に立っている時、当たり前のことではあるが力がなくなっている自分がわかる。糞尿を持参しなければならない人間をやめたくなる。キタキツネやヒグマに帰りたくなる。どこか、ボクのDNAは彼らと共通の部分があるらしい。本当のことを言えば、風邪で高熱の中で3,700コマのフィルムの中から135コマを選び、キャビネサイズのプリントにしたのだ。その中からまた選んで選ぶ作業をしたのが、この「冬の終わりに春へ、そして秋へ」の物語なのだ。選んでいる時の体調が38.7度の高熱なのだから、上述したように带状疱疹後神経痛と血圧の乱高下でいかげん頭の中もおかしいし、作業自体が怪しげなものと思う。それでも、こんなできばえのものでも愛おしくも思うし、こんなものにもでも命を賭けてみようとも思うのである。「ボクの命の叫びが込められているのだ」と気取ってみたいが、そんなものにもなっていない。一回一回のロケーションは、命がけなのだが、どのコマを見ても、「どこに命が込められているのだ」と苦笑いをする、もう一人の自分の存在がある。とうとうボクの悪癖の一つ、写真を本格的に撮り始めてしまった。ボクにとって撮影することは悪い悪い癖なのだから。だれかに遠慮があるのかもしれない。35mm版フルサイズの撮像素子を持つデジカメが今秋、40万円以下で売り出された。それまで100万円以上の値段であったからいよいよ戦国時代に入った。それでもボクはフィールドでは使わない。金もないのだが予備電池に、予備の記録素子、そして信号が失われる可能性もあるから小型のハードディスクも持参しなければならないから、現場でカメラから転送などする気にはなれるわけがない。（'05.10.31.記）